

「天の父のように」

マタイ 5章 43-48節

『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。

自分を愛してくれる人を愛したとしても、あなたがたに何の報いがあるでしょうか。取税人でも同じことをしているではありませんか。

また、自分の兄弟にだけあいさつしたとしても、どれだけまさったことをしたことになるでしょうか。異邦人でも同じことをしているではありませんか。

ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい」

1. 渋沢栄一と福祉

大河ドラマの『青天を衝け』の主人公であり、資本主義の父とも呼ばれる渋沢栄一が福祉の先駆者でもあった。ということ『渋沢栄一に学ぶ福祉の未来』という本を読んで知りました。

渋沢栄一は資本主義の父ということで、資本家であって、営利主義者という、あまり良いイメージがないかもしれません。その本には、渋沢栄一がいかに福祉の発展に尽力した人物であったか、ということが書かれていました。

渋沢栄一は中央慈善協会という、現在の全国社会福祉協議会の初代会長でもありました。経営者として行き過ぎたことや間違ったこともあったかもしれませんが、しかし、貧しい人たちへの関心を持ち、福祉のためにお金を出し、そしてお金を出すだけでなく、時間もささげていたということを教えられました。

例えば、渋沢栄一の働きの一つとして救世軍への支援がありました。

救世軍は基督教の団体で「社会事業にあらざる救霊事業なし、救霊事業にあらざる社会事業なし」という理念を持っています。渋沢は生涯をかけてその救世軍の福祉活動を支援し続けたのです。

渋沢は救世軍について、物質的な救済だけでなく、精神的な救済も行っている団体だとして評価をしていました。実際に東京にある救世軍の施設をすべて回ったそうです。そして、そのような福祉の必要性を世の中に訴えました。

救世軍が新たに事業を起こすときには、発起人として名を連ねるほどで、また実業家に手紙を出して、資金を集めることもしていたそうです。

救世軍の山室軍平によれば、資金を集めるための紹介状を渋沢が4,5百通は書いたというのです。

そんな渋沢のために山室軍平は祈っていたそうです。そして個人的に話す機会があれば信仰をすすめていたようです。残念ながら、渋沢がキリスト教の信仰を持つことはありませんでしたが、それでも、渋沢が亡くなった際には、救世軍は弔意を表します。渋沢について最後に語られた言葉がこうです。

「善きサマリヤ人であった。私はいつまでも、彼を日本における救世軍の、最大なる恩人として記憶するであろう」

渋沢栄一が「善きサマリヤ人であった」というのです。

信仰を持たなくとも、世のため、人のために働きをする方がおられるということに、心動かされながらも、それでは信仰を持っているこの私は一体何をしているのだろうか、恥かしい思いにもなります。

信仰を持たずとも、良き働きをする人がいます。それは、今の時代も変わらないことなのかもしれません。それでは、クリスチャンである私たちはいかに生きるべきかと考えさせられます。

2. あなたの隣人を愛しなさい

マタイの福音書 5章 43節。

『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています」

「あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め」と言われていたというのです。人々はその通りだと、何の疑いもなく聞いていたことでしょう。

私たちが同じように「あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め」と聞いたとき、何か違和感を覚えるでしょうか。おそらく世の中のたいていの人は、当たり前になっていることかもしれません。意識せずとも、多くの人々は、この言葉の通りに日々過ごしているのではないのでしょうか。

「あなたの隣人を愛しなさい」という言葉は、旧約聖書にある言葉です。

レビ記 19章 18節。

「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」

しかし、ここには「あなたの敵を憎め」という言葉はありません。「あなたの敵を憎め」という言葉は、後から付け加えられて、時代を越えて言い伝えとなり、ありがたい教えのようになって、広まってしまったのです。

「あなたの隣人を愛しなさい」と言われて、「だとしたら、隣人でなければ愛さなくても良いのか」とひねくれたことを考えてしまうのが人間です。そして、「あなたの敵を憎め」と言うことを、その通りだと、安心して、納得して、受け入れてしまうのです。

愛することを熱心に考えるよりも、「いかに愛さずに許されるか」ということを考えてしまうのが人間の弱さであり、罪深さです。

「いかに人を愛さなくても済むか」、「いかに最低限、ギリギリのところまで「隣人を愛する」という教えを守ることができるか」と、私たちは愛することよりも、つつい自分を正当化することに熱心になってしまうのです。

そのようにして、当時の人々も、自分たちの愛すべき隣人をとても狭い範囲に限定してしまっていました。そして、敵という存在を作り、敵であれば憎んでも良いという自分勝手なルールを作っていたのです。

ルカの福音書 10 章に「良きサマリヤ人のたとえ」があります。ある律法の専門家が「私の隣人とはだれですか」とイエス様に質問するところから始まります。

質問に対して、イエス様がたとえ話でお答えになります。

それは、強盗に襲われて半殺しにされていたユダヤ人がサマリヤ人に助けられるという話です。律法の専門家はユダヤ人とサマリヤ人が隣人だとは考えてもいなかったでしょう。しかし、イエス様は、誰が強盗に襲われた人の隣人となることができたかと問いかけ、「あなたも行って、同じようにしなさい」と言われました。

つまり、イエス様は、私たちに対して、隣人を限定してしまうのではなく、積極的に隣人になるように勧めているのです。イエス様の教えは、むしろ隣人を増やしなさいと、隣人になっていきなさいと言うのです。

私たちの考えとは全く正反対です。私たちは隣人をどんどん減らして、どんどん敵を増やそうとします。そのような私に対して、イエス様は、隣人を増やしなさい、愛すべき対象を広げていきなさいと教えるのです。

確かに、私たちは、愛が足りません。ですから、人を愛することは簡単なことではありません。たった一人を愛することも難しいのに、さらにまた一人、そしてまたもう一人

と愛することができるのでしょうか。私たちは、愛することをあきらめたくもなります。それでも良いと言ってもらいたくもなります。そして、これが精一杯だと自分で線を引いてしまうのです。

しかし、イエス様は「それでよし」とはしないのです。イエス様が教える愛は私たちの小さな愛と比べ物にならないほどの大きな愛です。イエス様は決して妥協をするお方ではありません。そして、「あなたも同じようにしなさい」と言われるのです。愛することにおいてではありません。すでにイエス様はこのようなことを言われていました。

マタイの福音書 5章 21-22 節。

「昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければならない」

あなた方は、「殺してはならない」ということを聞いているが、殺してはならないだけでなく、怒ってはならないとイエス様は言われていたのです。それだけではありません。

マタイの福音書 5章 27-28 節。

「『姦淫してはならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです」

情欲を抱くことさえも、心の中で姦淫を犯すことになるのだと言われます。イエス様は、私たちの行いだけでなく、心の中も見られるお方です。

特に愛することにおいては、私たちがどのような心の状態であるかが問われます。私たちは心から隣人を愛することができるのでしょうか、それとも自分中心な思いが少しでもあるのでしょうか。心の弱い私たちにとって、愛するということは本当に難しいことです。私たちはこれまでも愛するということに様々な苦労を経験していることでしょう。

3. 敵を愛し、祈れ

もうだめだと、自分で限界を決めて、愛することをあきらめてしまいそうになる私たちにイエス様は言います。

マタイの福音書 5 章 44-45 節。

「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。天におられるあなたがたの父の子どもになるためです」

イエス様は私たちに隣人を愛しなさいと言うだけでなく、自分の敵だと思ふような相手も愛しなさいと言ひ、さらには、自分を迫害する者のためにも祈りなさいと言うのです。イエス様は私たちが考える限度を超えて愛するように教えるお方です。

私たちは、自分を迫害する者、危害を加えたりする者がいるならば、愛するどころか、自分の身を守るために戦いたくもなりますが、そのような相手に対しても愛を持って祈るように勧められているのです。

イエス様の愛の教えに驚くしかありません。イエス様は妥協することなく本気で愛について教え、全人類の和解を願っておられるのです。

私たち自身のうちには、そのような大きな愛を持ち合わせていないので、イエス様が進める通り、祈るしかありません。

イエス様は次のマタイの福音書 6 章で「主の祈り」について教えられました。

マタイの福音書 6 章 10 節。

「御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように」

あきらめることをせず、父なる神様のみこころがなるようにと、祈り求めるように勧められています。ですから、私たちは祈ります。

マタイの福音書 6 章 12 節。

「私たちの負い目をお赦してください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」

私たちが隣人となって、愛し合うためには赦しが必要です。赦しがないと、敵は敵のままです。もし赦すことができれば、隣人となることができます。

「主の祈り」に続けてイエス様はくり返し、赦しの大切さを教えています。

マタイの福音書 6 章 14-15 節。

「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しになりません」

この、「赦す」ということは、私たちと天の父なる神様との関係にもつながります。天の父なる神様が私たちを赦してくださっている。だから、あなたがたも赦しなさいと言われるのです。

天の父なる神様の子どもとして、イエス様ご自身が私たちに模範を示してくださいました。イエス様は、ご自身を迫害し、十字架にまでつけた人々のために赦しを求めました。

ルカ 23 章 34 章。

「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」

イエス様は赦しをもたらすお方です。同じように、私たちも愛すること、赦すこと、祈ることが勧められています。

マタイの福音書 5 章 44-45 節。

「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。天におられるあなたがたの父の子どもになるためです」

私たちは、自分の力では愛することも赦すこともできません。ですから、祈ります。祈ることから始めるのです。祈りを通して、私たちのうちに愛が生まれ、赦しの心が与えられるからです。

私たちのうちに愛がないとあきらめるのではなく、世の中に争い事あふれているとただ嘆くのではなく、祈ることができるのです。

私たちは、日々の生活の中で、誰かのために、隣人のために、敵だと思ような人のために、祈ることができるでしょうか。

イエス様が私たちに与えてくださった御霊が助けてくださいます。御霊が私たちと父なる神様の関係を守り、御霊が私たちの祈りを助け、御霊が私たちに愛と赦しをもたらしてくださいます。

ローマ 8 章 14 節。

「神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです」

ローマ 8 章 26 節。

「同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださいます」

4. すべての人のために

私たちは、御霊に助けられて祈る者でありたいと思うのです。そして、父なる神様の愛を現す者でありたいと思うのです。

マタイの福音書 5章 45-47 節

「父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。

自分を愛してくれる人を愛したとしても、あなたがたに何の報いがあるでしょうか。取税人でも同じことをしているではありませんか。

また、自分の兄弟にだけあいさつしたとしても、どれだけまさったことをしたことになるでしょうか。異邦人でも同じことをしているではありませんか」

私たちの父なる神様は、悪人にも善人にも太陽を昇らされるお方であり、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせるお方です。父なる神様の愛は無条件です。

ローマ 5章 8 節。

「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます」

私たちは、悪人にも善人にも太陽を昇らせてくださるお方によって、まだ罪人であったときに、悪人であったときに、正しくない者であったときに、愛され、赦され、恵みを受けた者なのです。

私たちは無条件の愛によって愛されている者です。私たちは罪人であったにもかかわらず赦された者です。

もし、父なる神様の愛が条件付きであれば、愛されることもできず、赦されることもありませんでした。

それなのになぜ、私たちの愛は条件付きになってしまうのでしょうか。自分が愛しやすい人を愛することは簡単で、誰にでもできることです。取税人でも異邦人でもできることだと言われています。

私たちが、条件付きで愛するがゆえに、多くの人を愛することができずに、排他的になってしまいます。私たちは愛すべき人選んだり、愛の限界を自分で決めてしまうのです。そのようにして、父なる神様の無条件の愛とは全く正反対の愛し方になってしまいます。父なる神様の愛を経験し、赦され、神の子どもとされたにもかかわらず、どうしても私たちは父なる神様の愛から離れてしまうのです。

父なる神様の愛は、私たちの考える限界を超えるものです。できることならば、私たちは自分で愛の範囲を決めずに、父なる神様がそうであるように無限の愛を追い求めたいのです。私ひとりで全ての人、全人類を愛することはできないにしても、目の前にいる人を分け隔てなく愛する者でありたいと思うのです。

父なる神様の愛を知っているクリスチャンだからこそできることがあるはずです。御霊によって祈りつつ、限界を越えて、私の小さな愛ではなく、父なる神様の大きな愛によって生きるクリスチャンを目指したいと思うのです。

5. 賀川豊彦

サバティカル中に東京の「賀川豊彦記念松沢資料館」に行ってきました。信仰者である賀川豊彦のその生涯における、キリストの愛によってなされた様々な働きが紹介されていました。労働組合運動、農民運動、協働組合運動、関東大震災における支援活動等です。

信仰を持った賀川豊彦が、ハンセン病患者の世話をする信仰の先輩の姿を目の当たりにしつつ、賀川自身、周囲の人たちから「賀川は「隣人を愛せよ」という聖書の言葉を、身をもって実践しはじめたのだ」と言われるほどに、貧しい人に寄り添い、神戸のスラムでの救済活動、そして社会的な運動にも積極的に関わるようになります。ついには世界の賀川と呼ばれるようになり、反戦運動や敗戦後には「国民総ざんげ運動」を起しました。

賀川豊彦の生涯を学びつつ、信仰を持って、こんな大きな働きをした人がいたのかと感動しました。

6. 私たちに期待されていること

おそらく神様は、私たち一人ひとりに期待しておられる働きがあるのではないかと思います。祈ること、愛すること、仕えること、自分のためにではなく人のために働くこと。具体的には人それぞれでしょう。

レビ記 19 章 18 節。

「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」

とされています。私たちはどうしても、神様の大きな期待を小さくしてしまいます。「あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め」と条件や制限を付け加えてしまう人々のように。私たちも同じように、自分自身の弱さや、罪深さゆえに、自分はこのままで良い

と勝手に決めてしまいます。

しかし、私たちが考えるよりも神様の期待は大きいようです。

I ヨハネ 3 章 16 節。

「キリストは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから、私たちも兄弟のために、いのちを捨てるべきです」

イエス様がすべてをささげて、私たちに愛を示してくださいましたのと同じように、私たちもすべてをささげて、私の人生を通して、愛を現しなさいと勧められています。

それは、神の命令だと言われます。

I ヨハネ 3 章 23-24 節。

「私たちが御子イエス・キリストの名を信じ、キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと、それが神の命令です。

神の命令を守る者は神のうちにとどまり、神もまた、その人のうちにとどまります。神が私たちのうちにとどまっておられることは、神が私たちに与えてくださった御霊によって分かります」

この命令はいやいやながら従うものではなくて、喜んで従うものです。クリスチャンとして父なる神様に愛される喜びを知っているからこそ、喜びを持って愛することができるのです。

しかし、現実には喜んで愛するということが難しいこともあるでしょう。ですから私たちは、祈りつつ、御霊の助けを求めます。

自分のしたいこと、簡単にできることだけをするのではなく、神の命令を聞いて、父なる神様のみこころのために歩むために、御霊の助けが必要なのです。

ガラテヤ書 5 章 16 節。

「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません」

御霊が私たちの内にある、肉の欲望、悪い考え、自己中心的な罪を取り除いてくださり、御霊の実である、愛や喜びや品性を持つことができるようにと成長させてくださるので、私たちは御霊によって成長し、成熟し、父なる神様のようにあらゆることにおいて完全な姿に日々少しづつ近づいてゆくのです。

7. 神に選ばれた者として

マタイの福音書 5 章 48 節。

「ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい」

イエス様の教えのまとめの言葉です。妥協をせずにすべての人を愛するようになりなさい。たとえ今できなくとも、そこを目指して、祈りつつ、成長し、成熟しなさいという教えです。

まず父なる神様が、誰に対しても、私に対しても、罪びとである私たち一人ひとりを愛してくださり、恵みを与え続けてくださるお方であることを感謝したいと思います。そして、感謝と共に、与えられた愛によって生きる者になりたいと思います。

旧約聖書の時代、父なる神様はイスラエルの民に期待をしていました。

申命記 17 章 13 節。

「あなたは、あなたの神、主のもとで全き者でなければならない」

そして、イエス様の時代、弟子たちも期待されていました。

ヨハネの福音書 15 章 16 節。

「わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようにするため」である。

今を生きる私たちはどうでしょうか。私たちひとりひとりにもそれぞれ、父なる神様から与えられた期待があるはずです。

8. 『信仰入門』

ジョン・ストットの『信仰入門』という本があります。

その『信仰入門』の最後の最後に書かれていることは、「クリスチャンには与えられた責任がある」ということです。

こう書かれてあります。

「クリスチャンの生活は、きわめて家族的です。クリスチャンは父なる神との関係において成長し、信仰者同士の交わりを大切にします。

しかしそれだけのことだと、教会は排他的な集まりとなり、クリスチャンはこの世から隔離されて、教会を修道院のようなものにします。

また、クリスチャンは、自分のことばかりを考えている利己的で善人ぶった人、教会も閉鎖的な寄り合いと見られるようになるでしょう」

クリスチャンの教会の交わりは良いものです。しかし、ただそれだけだと私たちはいつのまにか、排他的な集まりとなってしまうのです。そして、意識せずとも「あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め」というような状況になってしまいます。

しかし、ジョン・ストットはこう続けます。

「真のクリスチャンは決して内向的ではありません。イエス・キリストのことをまだ知らない友人たちに深い関心を抱き、彼らの益になることをやってあげようと積極的に考えるでしょう。

歴史を通し、教会は困窮者や虐げられている人のために、慈善事業をしてきました。貧困、飢餓、病気、抑圧、差別、奴隷、囚人、孤児、難民、生活困窮者を私たちは決して放っておけません。

多くのクリスチャンがいま世界中で、キリストに従うがゆえに、人々の苦しみや不安を減らそうと、努力しています。

それでもなお、これらの仕事は、まだまだ必要とされています。

ときには、クリスチャンでない人も、熱心にこれらの分野で活躍していますが、クリスチャンは自分たちの怠慢を恥としなければなりません」

このようにまとめられていました。クリスチャンでない人も、熱心に良き働きをしているように、渋沢栄一が「善きサマリヤ人」と呼ばれるような中で、私たちはクリスチャンとして、山室軍平や賀川豊彦という信仰の先輩の働きから教えられながら、私がなすべき働きは何だろうか、私が愛すべき人は誰だろうか、私は誰の隣人になることができるだろうか、御霊によって祈りながら、イエス様のように、父なる神様のように、私の人生を通して愛を現わすことができるようにと願いながら歩み続けたいと思います。